

1-2-16bメディア

「メディア」の第2弾は、「インターネット」によって社会がどう変わったか、考えます。

③インターネットメディア

i) 多対多のメディア

インターネットが普及した現在、メディアの中心はマスメディアからインターネットメディアに移りつつあるといわれます。

マスメディアが、特定のテレビ局や新聞社から不特定多数の人間へ、という一対多の情報発信をしていたのに対して、インターネットメディアは、不特定多数から不特定多数へ、と多対多の双方向的な情報発信がされるようになりました。

ii) 弱者の声

インターネットメディアの特徴の一つが、誰でも発信できることです。

インターネットが始まった20世紀末、インターネットはさまざまな人たちがさまざま意見を言える場なのだから、情報は多様化し選択は増え、より自由で開かれた社会が生まれるにちがいない、と考えられていました。

民主主義にとって、さまざまな意見があることは生命線です。

インターネットは、その意味で、民主主義を支えるメディアとして登場したのです。

だから、、、

携帯電話を通じて戦場から届く映像が、戦争の実態を教えてくれるようになりました。

権力や企業が隠してきた不正や巨悪が暴かれるようになりました。

これまで無視されてきた弱者の悲痛な声が届くようになりました。

これらの情報が人々の意識を変え、社会を動かしたことはたしかでしょう。

iii) 拡張された日常

が、それ以上に、ソーシャルメディアは私たちの日常を変えました。

ソーシャルメディアとは、個人による情報発信、情報交換を基本とするインターネットメディアの一種です。

だから、、、

日記代わりのブログに、食事の写真を上げる人がいます。

投稿サイトで、ゲーム配信をする人もいます。

身内受けを狙っただけの投稿動画がバズって、世界中で人気者、なんてことも起こります。

逆に、チャットで何気なくつぶやいた言葉が炎上することさえあるかもしれません。

が、問題はもっと身近にあります。

たとえば、家族と食事をしている時に、スマホに友達からメッセージが入り、やりとりすること、ありませんか。

このとき、君は、異なる次元の、2つの社会関係のなかに同時に存在しています。

目の前にいる家族との関係の場と、目の前にいない友達との関係の場。

テレビを見て、とか、小説を読んで、とか、日常にいながら、日常とは違う世界を味わうことがあったかもしれません、この場合は、両方ともその人の日常です。

異なる2つの関係の場が交錯しながら、私たちを包含しています。

そこには、これまでと違った、いわば拡張された日常があります。

しかし、目の前にいる人そっちのけでSNSに夢中になるのは、さすがに鬱屈でしょう。

逆に、目の前のことが忙しすぎて、メッセージを見損なったり返信し忘れたりすると友達をなくすかもしれません。

私たちは、まだまだ、拡張された日常との付き合い方がうまくないようです。

電車内での会話はOKなのに、電話はマナー違反だと非難されるのも、こうした二重性に違和感を感じる人が多いせいでしょう。

iv) 平等性の善悪

このように、インターネットメディアは、私たちの日常を、そして、その可能性を広げてくれます。

が、誰でも発信できるということは、もちろん、よいことばかりではありません。

誰がどのような立場で語っているかもわからない情報が垂れ流されています。

ただの噂や憶測がさも事実であるかのように飛び交います。

誰かを貶めるために、悪意をもって流される情報もあります。

そのような怪しい情報にもとづいて、何も悪くない人に、心ない言葉を無遠慮にぶつける人がたくさんいます。

これは、実は、誰でも発信できるから、つまり平等だから起こっていることです。

「悪いことはしたら怒られる」と思うと、人は「悪いこと」をしにくいものです。

平等だということは、「怒ってくれる」、上の立場の存在がないわけです。

既存の法律で取り締まれるものもあるので、正確にいえば、「怒る」存在がいるにはいますが、**匿名性**が高いために、誰がやっているか、見つかりにくい。

では、徹底的に取り締まるようすべきか、というと、それも簡単にyesとは言いにくいでしょう。

というのは、こうした平等性こそネット社会の最大のメリットだからです。

言論の自由は民主主義の根幹でもあります。

v) 分断のメディア

もう一つ。

情報を選び好みできることも、インターネットメディアの特徴です。

自分の見たくない、聞きたくない話は無視できるわけです。

マスコミを「マスゴミ」と呼んで相手にしない人たちが少なからずいます。

それは、自分の望んでいない情報を聞かされてしまう、あるいは、逆に、自分の望んでいる情報をちゃんと流してくれないからです。

ところが、ネットでは、自分にとって都合のいい情報、快い情報ばかりを選ぶことができます。

ネット上のコメント欄が賛成ばかり、反対ばかりに偏ってしまうのは、同じ意見をもつ人たちだけが集まってるからです。

SNSでは、同じ思いをもつ同志が自分たちの意見の「正しさ」を確認しあっています。

インターネットは、より多様で自由な社会をもたらす、と期待されたが、現実には、「社会の分断化」を促す側面もあるわけです。

vi) メディアの暴力性

テレビに出て有名になることはいいことばかりではありません。

特に事件に巻き込まれたりすると、被害者なのに、私生活まで晒されてよけいに傷ついてしまうことすらあります。

こうしたマスメディアの暴力性は、以前から問題視されていました。

が、インターネットメディアによって、その暴力性はより過酷になったようです。

ネット上に、根拠のないわざ話や作り話が行き交い拡散されて、それを信じた人が正義漢面して心ない言葉をぶつけたりします。

それもこれも、匿名性が高いために、無責任に発言できるからです。

その意味で、陰湿さが増した、ともいえます。

が、インターネットは情報を選り好みできるはずです。

見たくなかつたら見なければいい。

とならないのは、もうすでにネットが私たちの拡張された日常の一部だからです。

SNSのグループを「コミュニティ」と呼ぶのは偶然ではないでしょう。

「コミュニティ」とは、その人が帰属する社会。

その人のアイデンティティを支える、大切な仲間です。

イヤだと思っても、「コミュニティ」からなかなか抜け出せないのは、現代人も前近代の人たちと変わらないようです。

それをネット依存症として病気扱いすることができますが、もしそうなら、現代人のほとんどがその病気から抜け出せなくなっているのではないでしょうか。

vii) ノイジーマイノリティ

現代社会が、これほどの量の情報とどううまくつきあうか、まだとまどっているのはたしかでしょう。

弱者の声を聞くことはいいことです。

が、ほんの一部の声で、これまでの暮らしが壊されてしまうということが起こっています。

たとえば、大晦日の除夜の鐘が、移り住んできた一部の住民の苦情で中止になったりします。

子供の遊び場である公園が、子供の声がうるさいという1件の苦情で廃止されたりします。

大きな声を出したもん勝ちになるのは、それに過剰に反応してしまう社会があるからです。

私たちの日常が拡張された日常ならば、私たちは、拡張された社会、拡張された現実を生きています。

それは、インターネットメディアがもたらした社会です。

そこには、メリットもデメリットもあります。

それとどう向き合っていくか、どう折り合っていくか。

これまで培ってきた人間のマナーとか道徳とかをもちだすのは簡単ですが、それではきっとコントロールしきれません。

現在は、その向き合い方、折り合い方を模索し、試行錯誤している過渡期なのでしょう。